

ぎょうだ  
**歴史系譜** (215)  
**行田の歴史再発見** 18

足袋産業の躍進

行田の足袋づくりは、明治23年（1890）ごろからミシンが導入されて生産の近代化が始まり、電信、銀行、馬車鉄道など社会資本の整備と相まって近代産業へと脱皮していきます。

近代化と並行して足袋商店は、有力な足袋の産地がなかった東北、北海道へと販路を広げ、日清戦争で海軍から艦上足袋を、次いで日露戦争では陸軍からわらじ掛け足袋を大量に受注するなど、軍需品特需を契機に大きく生産量を伸ばしていきました。

日露戦争の好景気をきっかけに、足袋業界では工場建設ブームが起こり、それとともに製品をしまっておく倉庫（足袋蔵）も数多く建てられるようになります。

明治43年（1910）に電気の供給が始まると、ミシンの動力化が進められ、のこぎり屋根の大規模工場も建てられ始めます。

しかしながら行田の足袋産業は、企業統合による大規模化、大企業化には進まず、のれん分けして独立してい



昭和初期の足袋工場風景

く（これを「仕上がる」といいます）小規模分業経営の道を歩みました。

大正時代に入ると、足袋産業は分業化が進み、織布業、染色業、ネル張業、底張業、印刷業、箱屋、糸商、ミシン屋、増地業など足袋関連産業が派生して、まち全体が足袋づくり一色に染まっていきます。

第一次世界大戦後の不況により、行田の足袋産業は一時的に停滞しますが、大正12年（1923）の関東大震災を契機に東京で売り上げを大きく伸ばし、全国、そして海外へとさらに販路を広げていきました。

このころになると、足袋産業の発展で行田の中心市街地は手狭になり、昭和3〜8年（1928〜1933）に向耕地（現在の向町）、竹ノ花耕地（現在の桜町1丁目）の区画整理が相次いで行われると、大規模足袋工場が次々に進出していきます。

そして昭和13年（1938）には、約200社（組合加盟114社）が、年間約8千500万足、全国の約8割の足袋を生産するピークを迎え、行田は、日本の足袋のまちになりました。

（文化財保護課 中島洋一）

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃん分かりやすく紹介します。



このコーナーでは4月号でゼリーフライ、5月号でフライを紹介する予定です。撮影にご協力いただける店舗がございましたら、2月29日(水)までに広報広聴課へご連絡ください。なお、応募多数の場合は抽選となります。

**こぜにちゃんが**  
**行く!**  
 with フラベネ

さいたまけんりつそうごうきょういく  
**埼玉県立総合教育センター**

旧行田女子高等学校の施設を改修して平成23年4月1日にオープンした埼玉県立総合教育センターは、主に学校の先生を対象にした教育研修施設です。

センターには、42の研修室があって、多いときには800人を超える先生が研修に参加する、埼玉県を代表する施設なんですよ。

教科書や教育に関する図書・資料がある教育資料室（図書室）はいつでも利用できます。一般公開や体験教室などのイベントの時には、そのほかの施設も見に来てくださいね。

今月の表紙

1月7日に、産業文化会館、市役所前および水城公園で行われた行田市消防出初式。そのアトラクションの一つとしてとび組合がはしご演技を行いました。力強く縄を回転させながら入場した職人たちは、その後スリル溢れる演技を披露。詰め掛けた観客からは悲鳴交じりの歓声が上がっていました。（関連ページ16ページ）

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。

■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。

■市報をカセットテープに録音したものを希望者宅にお届けします。

ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。



市報ぎょうだは再生紙を使用しています